

〈編集後記〉

相愛国文十一号をお届けする。二十号への第一歩である。この記事を執筆するために、改めて本号の原稿を通読すると、そこに、やはり一つの特徴を感じる。それは、文献学であり考証学である。そして、これがわが国文学科における研究の基本的姿勢であるといつてよいだろう。編集子は、そこにいささかの自負を感じる。

相愛における、研究上の、この姿勢を育ててこられた柿谷雄三先生をお見送りする日がとうとうやって来た。夜十時を過ぎても消えることのなかった、先生の研究室の灯を見るのができない淋しさが身に染みる。饒舌な生き方がもてはやされる昨今にあつて、寡黙な態度を貫かれたお姿に接することができたのは、望外の幸せであつた。先生のますますのご健勝を念ずるばかりである。

福田美楯の文字を追いつつ、継承してゆかねばならない研究の姿勢を、今しみじみとかみしめている。
(H)

〈執筆者一覧〉

鈴木 徳男	本学国文学科教授
橋本 雅之	本学国文学科助教授
北谷 幸册	本学国文学科教授
鳥井 正晴	本学国文学科教授
柿谷 雄三	本学国文学科教授
山本 和明	本学国文学科助教授

相愛国文 第十一号

平成十年三月二十五日 印刷

平成十年三月三十日 発行

編集・発行 相愛女子短期大学国文学研究室

〒559-0033 大阪市住之江区南港中四丁目一
Tel 〇六一六一二一五九〇〇(代)

印刷所 和泉書院

〒543-0002 大阪市天王寺区上汐五丁目三十八
Tel 〇六一七七一一一四六七